

氏名	田中良明
学位の種類	博士(中国学)
学位記番号	甲第91号
学位授与年月日	2012年3月22日
審査研究科	文学研究科
論文題目	『漢書』天文志の思想的研究
論文審査委員会	(主査) 大東文化大学教授 林 克 (副査) 大東文化大学教授 三浦 國雄 (副査) 大東文化大学教授 渡邊 義浩 (副査) 東京大学教授 川原 秀城

田中良明 博士論文 審査報告書

田中良明氏は、2003(平成15)年3月に大東文化大学文学部中国学科を卒業後、同年4月に同大学大学院文学研究科中国学専攻博士課程前期課程に入学、2007(平成19)年3月に同課程を終了して修士の学位を取得した。同年4月に同後期課程に進学し、現在に至っている。2010(平成22)年4月より大東文化大学人文科学研究科兼任研究員を努め、2011(平成23)年11月より特例財団法人無窮会研究員を努め、現在に至っている。この間、『漢書』天文志の思想に関する研究を進め、このたび学位請求論文を提出することとなった。

1. 論文の要旨および特色

本論文は、『漢書』天文志に見える天文思想と災異説に対する考察を行ったものである。天文は人間世界の頭上で生起する諸現象の総称であり、中国では古来、天と人とが関連すると考えてきた。漢代における天文の概念を総括した書が『漢書』天文志であり、そこに見える天文に関する思想は、当時存在した各種の思想が入り乱れ、絡み合っただけで天文思想と呼びうる枠組みを形成していた。そのような天文思想の伝統的中核部分と、芽生えは古いが漢代になって隆盛した災異説の関係の分析を試みたものである。

本論文を目次に従って概観し、その後に各章の要旨を記述する。

序

第一章 『漢書』天文志に見える天人の関係性

はじめに

一、天文志の序文

二、天文志に見える陰陽説

三、天文志に見られる時令説

四、天文志の前半部分に見られる天人の関係性

五、事驗部分に見える天人関係

結語

第二章 『漢書』天文志と劉向『洪範傳』

はじめに

- 一、漢志前半部分と『洪範傳』との比較
- 二、漢志後半部分と『洪範傳』との比較
 - (一) 漢志前半部分と類似する占辭を記すもの
 - (二) 漢志前半部分に見られない占辭のみを記すもの
 - (三) 漢志前半部分に見られない占辭と、日時・事件を記すもの
- 三、漢志と『洪範傳』との關係

結語

第三章 翟方進の死

はじめに

- 一、漢志前半部分と『洪範傳』との比較
- 二、漢志後半部分と『洪範傳』との比較
 - (一) 漢志前半部分と類似する占辭を記すもの
 - (二) 漢志前半部分に見られない占辭のみを記すもの
 - (三) 漢志前半部分に見られない占辭と、日時・事件を記すもの
- 三、漢志と『洪範傳』との關係

結語

第四章 董仲舒以前に於ける災異への對應

はじめに

- 一、崇による對應
- 二、崇への對應の變化
- 三、「至治」による對應

結語

第五章 『漢書』天文志と五行志—漢代の日食記事を中心に—

はじめに

- 一、『漢書』五行志に於ける漢日日食記事の基本構造
- 二、天文思想や經書を理論的根據とする日食解釋記事
- 三、劉向・谷永の日食解釋記事
- 四、五行志の日食記事と劉向『洪範傳』

結語

第六章 天象解釋の展開—『史記』天官書・『漢書』天文志を中心に—

はじめに

- 一、『史記』天官書の記事十條の基本的內容
- 二、『史記』天官書の記事①～⑥の記述内容と、それに關聯する『漢書』天文志の事
驗記事等の比較
- 三、『史記』天官書の記事⑦～⑩の記述内容と、それに關聯する『漢書』天文志の事
驗記事等の比較

結語

結論

序は、天が中国思想史上最重要概念であり、中国思想史は天との関係の模索の歴史であって、その模索の一つの結果が『漢書』天文志であるとする。本論文は、その『漢書』天文志が創始し、以後の史書によって踏襲されることになった「事驗部分」を対象とする思想的研究であることを述べる。

第一章は、『漢書』天文志を記述内容から三部分に分ける。すなわち序文、概説部分（天文占に必要な知識を記す）、事驗部分（天文変異・占辞・変異に対応する後の事件を記す）、である。この三部分の思想的內容について、天と人との関連性に対する認識を主たる対象として考察し、序文・概説部分に共通する点として、①天人の関係の陰陽説による説明、②天文変異の原因が失政にあること、③人君の行動による禍福の有無の調整可能性、この三点を抽出する。残る三部分の一つ、事驗部分において上記①は確認できるが、②と③は確認できず、他の二部分に比べて特異であることを指摘する。その事驗部分の特異性の原因は、事驗部分が天人の関係性の存在を証明するために著述されたものであり、天文志の序文と概説部分に現れた天文思想の理想的・理想論的な理論であることによると推定する。

第二章は、『漢書』天文志の事驗部分が先行する『史記』天官書に存在せず、『漢書』天文志に始まることに注目する。このような『漢書』天文志独自の記述や構成の由来を探るために、『漢書』天文志と『開元占経』所引の劉向『洪範伝』の文章を比較する。「洪範」は『尚書』の一篇で五行（水火木金土）・五事（貌言視聽思）などを述べるが、所謂五行説とは元来異なり、前漢の伏勝・劉向などによる伝（注釈・解釈）において所謂五行説と関連付けられた。序文と概説部分において、①「洪範」五事・②子思孟軻の五行に由来する五常と③五星（水金火木土の五惑星）との対応が劉向『洪範伝』と大部分が一致する例と、一致しない例が存在する。この序文・概説部分における齟齬から、劉向『洪範伝』の五行説が導入されたとしても大きな意味を持たなかったこと、および事驗部分の記事が前漢代の天文官の手になるものばかりでないことを推定する。後者に関しては、事驗部分の記事が天文官に依るものであるならば、天文官が拠り所とした天文変異判断基準が前半部分に示されるはずであるが、示されていないことに依る。事驗部分と『洪範伝』との比較では、両者の記述に一致するものがあることから、『漢書』天文志への洪範五行系統の思想導入が劉向『洪範伝』に係ることを示唆し、同時に事驗部分の創出における劉向『洪範伝』の関与、すなわち『漢書』天文志のルーツは先行する『史記』天官書には見えないものの、劉向『洪範伝』にその一部が存在することを推定する。

第三章は、『漢書』天文志において、三部分における記述原則から外れる記事に注目し、その顕著な例として成帝期の宰相翟方進の死に焦点を当てる。翟方進は時の天子の崩御を予言する天文変異の出現に当たり、天子の身代わりになるよう周囲から促され、自殺に追い込まれた。その死は「天文変異の示す災禍は然るべき対処により、災禍が対象とするはずの人物から無関係の他者に移せる」という天文思想の存在を示す。一方、『漢書』天文志の大部分の記述は天文変異が不可避の結果を伴い、歴代の天文志も同様の傾向を示す。つまり、『漢書』天文志には二つの異なる天文思想が存在し、翟方進の死に関わる天文思想は、出現した天文変異に対して即時に解釈と対応を行うことにより問題の解決を図ろうとするもので、『呂氏春秋』や『史記』に類似例を見ることができ、伝統的に存在した天

文思想だったとする。この様に異質な天文思想が『漢書』天文志に盛り込まれた事に関しては、今後の検討課題とする。

第四章は、程度の差はあるものの、第一～三章のすべてに関連する思想である災異説に関して、その発生を解明するための考察を行う。その目的のために、著名な災異説論者・董仲舒以前における災異関連事象に対する人の対処方と、それを支える思想を取り上げ、災異説発生の必要性和必然性を探る。董仲舒以前における災異類似事象とその事象への対応の中で崇りをまず扱う。解決・対応困難な事件・事象への対処方として崇りの思想が存在したが、事件・事象と崇りを関係づけるのは占トであり、歴史の進展に伴う人間性への意識の深化に伴い、その非論理性・非倫理性が意識され、人間性や倫理性に軸足を置く対処法へと移っていくことを明らかにする。その先には儒教的価値観に基づく対処法が出現することを例示するが、その対処法にも当初は解決法に汎用性が無いという問題が残った。それを解消するためには、儒教的価値観を有する具体的な解決・対応方法を、より具体的かつ論理的に導き出す必要に迫られた。そこに『春秋』に載る前例や、『尚書』洪範に載る論理展開を用いた挙例法による方法論、つまり災異説が起こる余地と必然性があったと推定する。

第五章は『漢書』十志において、天文志が天文変異を載せ、五行志が災異を載せるという区別があるものの、五行志には日食・日月乱行・星隕・星孛・隕石といった天文災異に関する記述が見える点に着目する。まず、五行志の日食の記事を取り上げ、日食の解釈に過去の同様な事例を挙げるという挙例法によって、自説に根拠と論理性を附している例を示す。その論拠としては、天文思想と『春秋』『尚書』などの経書中の関連記述が用いられるが、それ以外に『洪範五行伝』の記述や同じ漢代の事例も含まれる。劉向や谷永は漢代の災異に独自の解釈を施し、それに依拠して目前の災異への自己の解釈に論理性を与えている。経書などを離れ、自説を論拠に使う理由は、『春秋』『尚書』などには多くの災異が載るとはいえ、個々の災異に対する解釈や対応方法が記されているわけではないことに対して、災異説者が具体的な解釈を構築していく必要があったと推定する。五行志の日食記事に対する如上の分析結果に基づき、天文現象を解釈するのであるから天文思想が用いられるのは当然のこととし、経書に依拠する理由は第四章で扱った災異類似事象に対する具体的・論理的な解釈と対応方法の発生が関わると推定する。経書に依拠する解釈の過程で必然的に創出されたのが災異説であるとの仮説を提示し、その根拠として董仲舒が『春秋』に依拠して多数の天文解釈を行ったことを挙げる。論拠としては『洪範五行伝』が『春秋』に続き、さらには同時代の事例に及んだと推定する。以上を総括し、五行志に日食・日月乱行・星隕・隕石の記事が記載される理由は『春秋』や漢代災異論者の記述の存在、つまり、災異説との関連した天文現象であるとする。天文志と五行志の記事が分割される星孛については、五行志記載記事は『春秋』や漢代災異論者の記述の存在が指摘できるが、一部の例外が存在し、それについては検討の余地を残す。

第六章は、天文を司る太史令たる司馬遷が記した『史記』天官書における秦始皇から武帝太初年間までの天文変異と地上での事件を記述する十条と、『漢書』天文志の事驗部分とに見られる類似の記述に対して考察を加える。十条において、天文変異の先見と対応する地上の事件の後出という関連づけに天文志の記述スタイルの萌芽の存在を指摘する。十条にはなく、天文志に初出するのが天文変異と地上の事件の関係性を示す占辞であるが、

天官書には記述されない天人関係解釈が存在し、この点で十条に天文志の記述スタイルの萌芽の存在を指摘し、検証する。その検証において、天官書・天文志で対応する記述において、天官書に見えない天文変異が天文志に付会されることがあり、それによって事件の性質が異なって見える例の存在を指摘し、この例が天文思想研究上での比較的重要案件であると章末に附言している。天文志の事験部分には天官書にも天文志の概説部分にも拘泥しない著述姿勢が見られるとする。また、天文志には地上での時間的前後関係を無視した天文変異の出現を地上の事件に結び付ける記述が存在し、このような記述が天文志以降の歴代史書天文志において増加することから、天文志における天文思想の変化発展を指摘する。さらに天文志には、天文変異と地上の事件が簡潔に記載されるだけで、関連する記述は五行志に記載される例が存在するが、その原因として天官書の時代に未発達であった災異説が時の推移とともに天文占をも内包していった結果と指摘する。

結論は、本論文の二大テーマである『漢書』天文志に見える天文思想と災異説を扱うことになった経緯に言及しつつ、各章での考察と成果をもとに、『漢書』天文志の事験部分が生まれた原因と、災異説との関係を記述する。そこにおいて、各章において言及のなかった新たな推測をいくつか提示し、それらを纏めて「『漢書』天文志とは、五行志に採用しなかった、若しくはされなかった天文解釈を事験部分とし、『史記』天官書へ洪範五行説を部分的に増入し、董仲舒説に似た序をラベルとして貼り付けたものではないのか」との結論を提示する。また、本論文の中心的考察対象である『漢書』天文志の事験部分の創出は、天人の関係性如何という点を無視し、天人の関係性の存在証明のみを可能とし、天との関係性を築き上げる試行錯誤への新たな提案となり得たであろうとの仮説を提示して結論を締めくくる。

2. 論文の審査内容および評価

次に本論文の評価を述べる。

『漢書』天文志の研究は現代天文学的観点から行われることが多いが、本論文は人文学的アプローチを取る。まず、研究対象の天文志を三分割し、それぞれの特徴を抽出し、事験部分の特異性を分析しているが、これは従来、ほとんど手を付けられたことがない研究である。その分析の結果は妥当であり、とりわけ事験部分の特徴を「天人の関係性のみの証明のための著述」と捉えたことは高く評価できる。

『漢書』天文志に劉向『洪範伝』の影響が及んでいることは予想された事であるが、両者の記述を対比することにより、天文志が資料の一部として劉向『洪範伝』を使用していることを明らかにしたことは評価に値する。

翟方進の死は従来、災異思想として論じられる事があったが、天文志に記載される天文思想としてのアプローチは田中氏が初めてであろう。看過されがちな問題であるが、同時代における異なる天文思想の存在を証明するために正面から取り上げた点は評価できる。

崇りに対する研究は多くはないが存在する。本論文が行った崇りに対する対処法の系統的な整理は妥当と判断できる。その延長上に災異説へと繋がる道筋を想定するが、災異説の成立に関して従来触れられることのない新しい視点からアプローチであり、今後の更なる研究の深化の余地を残すものの、妥当な想定と判断できる。

『漢書』五行志の日食解釈に過去の同様な事例を挙げるという挙例法によって、自説に

根拠と論理性を附している例を見出し、それを根拠に天文志の事験部分の特徴「天人の関係性のみの証明のための著述」を補強している。これにより、事験部分の特徴は固まったといえるだろう。

『史記』天官書と『漢書』天文志の事験記事の関係も妥当な推定である。

上述のごとく、各章での分析結果は妥当であり、それを相互に関連させるべきところは関連させ、全体として『漢書』天文志の新たな側面を開示した点は大いに評価できる。ただ、未完の課題、手つかずの課題が残されていること、また思想的には儒家を含む戦国秦漢の諸子思想との関連性研究の余地あると思われることなどがあり、今後の研究の深化によって更なる明快な成果を期待したい。

3. 結論

以上の審査内容および評価に基づき、本審査委員会は全員一致をもって、田中良明氏は博士（中国学）を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。